ヒメシジミ　*Plebejus argus micrargus* (Butler)

【選定理由】

愛知県からの最初の記録は 1951 年、南設楽郡旧作手村（現新城市作手）である。同村にはかつて広大な湿原が広がっており、黒瀬（善夫）、田原（長ノ山）、岩波、高里、鴨ヶ谷、清岳などに多産した。また、北設楽郡豊根村黒川（1969）、稲武町（現豊田市）黒田ダム（1968、1986）、御所貝津中根（1994）、月ヶ平（1968）、東加茂郡旭町（現豊田市）（1991）、西加茂郡小原村北（現豊田市小原北町）（1961、1964）、足助町香嵐渓（現豊田市岩神町）（1965）、などからも報告され、三河の山間部に限られた産地があった（高橋ほか, 1991）。しかし、これらのほとんどの産地から最近の観察例がない。旧旭町では 1999 年が最後の記録である。旧作手村では、2006 年の報告があるが、2007 年には発見されなかった。旧小原村、旧足助町では産地そのものが大きな環境の変化を受けた。

【形　態】

前翅長約 1cm の小型のシジミチョウ。都市部に普通に見られるヤマトシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミに似るが、前・後翅ともに裏面外縁に沿って橙色紋が並んでいることから容易に区別できる。近似種のミヤマシジミやアサマシジミ（ともに愛知県未記録）とは、後翅裏面の橙色の斑点の外側の黒点内に輝く藍色の鱗粉がないことなどから区別できる。翅表は、♂では青藍色、外縁は黒く、♀では暗褐色、外縁近くに橙色の斑紋をもつ。愛知県産は、他産地産の個体に比べ、一般に、♂の翅表の翅脈が黒く、♀の翅表の橙色紋の発達が弱い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では、豊田市や新城市、北設楽郡豊根村など三河山間部にのみ見出された。この産地は、近隣の岐阜県東濃地方や、長野県下伊那地方の産地とともに、中部山地帯の産地とは隔絶され、湿地草原に産する特異な生息地であった。

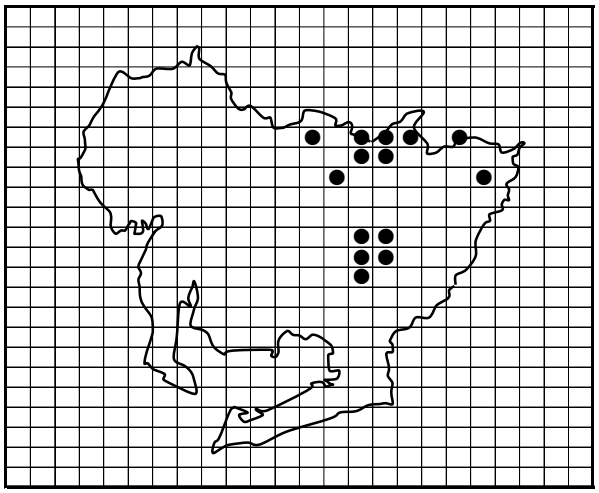
【国内の分布】

北海道では分布が広く、平地にも産する。東北から中部地方では山地性となり、山間の草地や路傍に生息する。近畿地方からは未知、中国地方では山間の湿地に産地が点在する。

【世界の分布】

国外では、ユーラシア大陸の北部に広く分布し、ヨーロッパに達する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

愛知県の産地は、すべて明るい湿性草原で、北海道や多くの中部地方などのような乾性草原や路傍からは生息が知られない。成虫は発生地を離れることがなく、低く穏やかに飛び、各種の草花を訪れる。食草付近の草むらに潜り込み、地表に近い草の茎などに産卵する。卵で越冬し、翌春孵化。幼虫の食草はマアザミで、アリが群がっていることが多い。蛹は、食草やその周辺の水草などから発見され、同時に数頭集まっていることがある。年 1 回、6 月から 7 月にかけて発生し、8 月にはほとんど姿を消す。

【現在の生息状況／減少の要因】

昭和 47 年（1972）7 月 12～13 日に藤岡村、小原村、足助町に集中豪雨があり、これらの山間の湿地はほとんどが土砂で埋没した。一方、旧作手村では、ほとんどの湿原が水田化された。長ノ山湿原など 3 箇所のみが保存湿原とされているが、乾燥化が進み、かつての湿原の様相を留める範囲は著減した。さらに、湿地周辺の水田には空中からの農薬散布が 2007 年にも行われており、かつてこの湿原に生息していた多くのチョウは 2007 年の調査時にはほとんど見られなかった。長ノ山以外の湿原は小規模であり、樹林化が進んでいる。

近隣の瑞浪市や中津川市など東濃地方の産地はすべて湿原であったため、埋め立てなどにより産地そのものが変貌し、本種も消滅した。

【保全上の留意点】

まず生息地である湿原の保存が優先されなければならない。農薬の使用に際しては、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

岐阜県瑞浪市や長野県下伊那郡根羽村赤坂峠などの近隣の生息地も環境の変化を受けたことにより一変し、本種は絶滅した。

【引用文献】

高橋 昭ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.

（2009 年版を一部修正）